

第九回ワークショップ（合評会）

2011年6月29日開催

■合評テキスト

林 羅山

1606 「排耶蘇」『キリシタン書 排耶蘇』（日本思想体系 25）、海老沢有道ら（校注）、pp. 414-417、岩波書店。

■参考論文

金沢 英之

2004 「《地球》概念のもたらしたもの：林羅山「排耶蘇」を読みながら」『比較文化論叢』（札幌大学文化学部紀要）14: 15-41.

武村氏から、当該文献・参考論文の解説があった。脱文脈化という本研究会において何が「脱」文脈化されるのかを考え、知る為の触媒として、当該テキストを選択した由が述べられた。議論は以下の流れで進んだ。

- I 「理」と「体」に関する論争の読解
- II 世界観の対立／イデオロギー論争
- III 当該文献における「脱文脈化」
- IV 言語について

I 「理」と「体」に関する論争の読解

林羅山（道春、以下、春）と不干斎ハビアン（以下、干）の議論における世界観のズレについて、確認と読解の作業が行われた。

まず、「理」と「体」に関する議論の噛み合わなさが興味深いという意見が出て（井頭氏）、春と干それぞれの「理」と「体」に関する理解の在り方が話題となった。

朱子学の理気説とは何かという質問があり（井頭氏）。武村氏は、自分にはその解説はできないが、（１）当時のキリシタンとしてラテン語の素養のあったはずの干が「理」を「ロゴス」と理解しているだろうこと、（２）そうだとすれば春は干の言う理と体をかなり正しく理解していると思われること、（３）その事が議論の食い違いの原因を考えるヒントになりうることを指摘した。加えて、干は基本的に神＝ロゴスと考えているはずだが、「光」と「灯」の話が出た流れで「光あれ」等という神の発語＝ロゴス（の発動）＝「理」という立場を取らざるをえず、「理＝ロゴス」よりも「神＝体」を先行するものと主張せざるをえなくなったことが記述から伺えるとも武村氏は指摘した。更には、春は「理」を実体としてのモノ（＝森羅万象）をそこに在らしめる理（ことわり）と把握しているが、その把握の限りで干のそれと食い違いはないだろう、とも述べた（武村氏）。

理気説については、朱子学では「理」は究極のもので、「気」はいわばそこから発する現象であるという深澤氏の解説があった（深澤氏）。これを受けて、朱子学の言う「理」とはヒンディー語のダルマ（秩序かつ規範）ではないかという意見があり（大杉氏）、ギリシャ・ラテン語の「ロゴス」も漢籍で言う「理」も森羅万象を統御する秩序をそうあらしめている力という点では大差がないだろうとの意見も出た（武村氏）。他方、「理」を物理学的な「理」に近いものと捉えれば、「理」の外側にあるものとしての神という「メタ存在者」の捉え方がキリスト者にとって問題になるだろうが、その意味で春と干の見解差を物理学とキリスト教の差異と捉えられるか否かという問いが出され（井頭氏）、武村氏は「恐らくは」と応じた（武村氏）。更に武村氏は、神はロゴスかつ存在であるがゆえに、ロゴスと存在のいずれが先行するかは神学的に大きな問いであったはずだが、この議論の場における干は理＝ロゴス＝神の発語という立場をとった結果、干のいう「体」が全てに先行する神の「存在」と同義になっているように思える、と述べた（武村氏）。

続いて、「体」に「人格神」のイメージも含まれているのではないかという問いが出された（深澤氏）。これに対し、それはありうるが、干のいう「体」のわかりにくさの一因として、自らも東洋人であるがゆえに春の用いる東洋思想用語に引きずられていることがあるかもしれないという意見が出た（武村氏）。これらの議論を受けて、春と干の間で理解の差が大きいのは「理」ではなくむしろ「体」の方ではないか、干は発芽の種子のような始原にあるものとして「体」を考えており、「理」より発した「器」を「体」と考える春とは相当異なるのではないかという意見が出され（大杉氏）、大方の賛同を得た。加えて「燈は体なり、光は理なり」という干の発言に見る「燈」はランプそのものではなく隠喩なのかという質問があり（井頭氏）、干のいう「燈」は恐らく光のアイデアとしての「体」の隠喩と言えとの応答があった（武村氏）。

更には、干の言う「無念無想」とはどういうことか、創造以前の即自存在としての神の在り方を指すのか、神がロゴスの的に展開する局面まで含意しているのかという問いが出された（深澤氏）。これに対し武村氏は、干が教育を受けた教派によって異なるはずだが、創造以前に神は「ひたすら在る者」だったと教わっていても不思議はなく、「夢想無念にして体あり」は「純然たる存在」としての神の在り方を説明しようとした言葉と考えられると述べ、加えて、全てに先行する神というキリスト者として譲れない線を守ろうとした結果、干における「理」「体」の用法に混乱が生じているという見解を述べた（武村氏）。

II 世界観の対立／イデオロギー論争

「理」「体」の話は、自然物理学の考え方に近いだけに、自然科学がデフォルトな文脈を構成している世界にいる我々は春と干の議論を評価する特権的地位を持ちえないだろう、という指摘があった（大杉氏）。これを受けて、確かに「地球は丸い」など干の発言の方が自然科学的には「正しい」と思えるが、それは我々世界の文脈から見ての話であることを考えれば、納得していない相手の世界観をほぼ正確に書き留めた春の記述こそ高く評価できるのではないかという意見があった（武村氏）。これに応じて、相手の思考を理解した上で理詰めで反駁しようとする春の姿勢を評価する意見（井頭氏）、その「理詰めで反駁」の部分は混ぜっ返しに近いもので上出来でもないという意見（大河内氏、武村氏）があった。これに関連して、自らの参与しない世界観を可能な限り正確に記述しようと試みる姿勢は人類学者のそれに近いと考えてよいかという問いがあり（大杉氏）、賛意が表された（武村氏）。

一方、高校教育水準よりも納得しにくい上下・東西の相対性などの観念を、干を含めた当時のキリシタンや西洋文化信奉者がなぜ飲み込めたのか、単に教えを鵜呑みにしていただけではないのかという疑念が提出された（大杉氏）。これに対しては、地球儀を見る機会の有無にもよる（井頭氏）、現実に海を越えて来た航海者が目前にいることで説得されずにはいなかっただろう（深澤氏）、などの意見が出た。

ここで、テキストが三部構成になっており、第一～三部にかけて春のスタンスが微妙に変化しているのが興味深いとの指摘があった（武村氏）。その指摘を受けて、記述を進めるにつれ、春は己の世界観の絶対性に対して確信が少しずつ揺らいでいるのではないかとの意見が出された（大杉氏）。

それと関連して、春と干の論争がはたして「イデオロギー論争」なのかという議論になった。春の主旨は、干の世界観を「正しくない」と述べることにあるように見えるが、それだけを目的としたテキストとみるには、タイトル『排耶蘇』の「排」は過

度であり、主目的は論理闘争ではなくてイエズス会への反感に基づいたイデオロギー闘争にあるのではないかとの指摘が出た（大河内氏）。これに対して武村氏は、

（１）「排」の字そのものは仏教諸宗派同士の折伏合戦でも旧来から使われていること、（２）当該テキストをイデオロギー闘争の一環として読むのが従来の見方で、将来的に封建制度を支える理論構築に寄与する儒者である春が干の持つ新しい自然科学知に基づく世界観を頑なに排除しようとしているという文脈で読解されるのが通例であること、の二点を説明した（武村氏）。この説明を受けて、キリスト者と仏教者の論争であれば救済論などの宗教的テーマについて対立するだろうが、春が儒者であるせいか、世界像をめぐる対立になったところが興味深いという指摘があった（深澤氏）。付して、日本における仏教側からのキリスト教排撃は、（１）キリシタン時代には専ら奪国論に基づき、明治期には科学との不整合性を突く形であったこと、（２）時代ごとに仏教の持つ文脈とクリティカル・ポテンシャルの組み合わせによって排撃の基盤が異なっていたこと、が解説された（深澤氏）。

ここで、春と干の論争態度をどう評価するにせよ、我々自身がデフォルトで有している自然科学知に基づかずにはいられないことを、大杉氏は再度指摘した（大杉氏）。更に大杉氏は、ラムセス２世は「結核で死んだ」と言えるか否かというラトゥールの議論を引き、自然科学知を平静に見ることのできるポイントはあるのかという問いを提出し、井頭氏に対し科学哲学はどこまで「真理」前提としている／いないのかを問うた（大杉氏）。これに対し井頭氏は、現代の科学的知から見て過去の科学的知が誤っている以上は現代の知識も不確定であるとの前提に基づいた「悲観的帰納法」を解説した。その上で、そうした議論の際に注意すべきことは、我々が我々の持つ概念図式を用いるしかないという点であり、せいぜい我々の信念体系の一部しか対象化できないこと、その全体を対象化できないことは押さえておかねばならないと井頭氏は指摘した（井頭氏）。この問題意識に繋がるものとして、アルチュセールの「切断」すなわち「徴候を読む」態度が挙げられた（大杉氏）。

Ⅲ 当該文献における「脱文脈化」

春と干の間の信念体系の衝突をヘーゲル的な信と知の枠組みで見ると、イエズス会は最終的に「信」へ、朱氏学は相対的に「知」へ向かう傾向が看守できるが、複数の信念体系が衝突する時に「信か知か」という枠組みを導入することでより高次の判断材料が得られるのではないかという提起がなされた（大河内氏）。これに対し、人があるイデオロギーなり世界観を持って他の世界観と闘争するというのは究極的には「好き嫌い」に基づく選択の結果としての行為であるのかという問いかけがあり（武

村氏)、そもそもそうした選択は可能かという問い返しがあった(大河内氏)。これに応じて、もし春が第一～三部にかけて自らの確信を次第に揺らがせているのならば、春は複数の世界観を前に揺らぎながらも選択を行おうとしており、そこでは自らの立つ世界観の外に立って複数の世界観を観望するという脱文脈化が始まっているのではないかという見解が示された(大杉氏)。そこで言う脱文脈化とは世界観から身を挽き剥がすという意味かとの質問があり(井頭氏)、そうならばキリスト教的世界観と仏教的なその間を身軽に飛び越える転びバテレンの干の態度は面白く見え(大河内氏)、春が脱文脈的に面白いとは通常誰も言わないが(武村氏)、新しい信念体系を突き付けられた人として春の対応はまっとうであること(井頭氏)、信念体系を「飛び越え」が本当に可能なのか、可能だとしてそれを脱文脈化と言えるのかという観点からすれば、むしろ干よりも春のほうが脱文脈的に見えること(大河内氏)、等について議論がなされた。これに応じて深澤氏は、同時代のヨーロッパで行われていた切実な脱文脈/再文脈化の例として、創世記を太陽中心説/地動説的に再解釈するヤコブ・ペーメの試みに言及した。その上で、春はこの段階ではまだ再文脈化を行っていないとは言えないが、江戸後期に地動説が受け入れられていくその前段階としての揺らぎは既にここに看守できるかもしれないという意見を述べた(深澤氏)。

IV 言語について

春の守ろうとしていたものが何であるかが議論になった。久保氏は、春は干の説明を粗雑と考えているようであり、論争において春はいくぶん教育的な立場を取っていたのではないかと指摘した。また、恒川隆男『2つの世界のオイディプス』を引いて、天動説＝主観、地動説＝客観とするのではなく、即主的/即客的という概念で春と干の議論を理解すれば、即主的には春の主張も「正しい」と言えると述べた上で、正誤はともかくとして春の守りたかったものは参考論文にあるように上下の絶対性であるのかと問うた(久保氏)。これに対し武村氏は、春の守ろうとしたのはむしろ作文上の何らかの価値であって、その価値の高下も上下と関わっており、春にとって重要なのはロジカルな言語(ロゴス＝理を体現するところの言語)であって、世界観以前に干の言葉の用い方を許容しがたかったのではないかという見解を述べた(武村氏)。もしそうならば、エレガントな言語で上下の相対性を解説されたら春も納得するのに吝かではなかったのではないかとの意見があった(井頭氏)。一方で干の他の著作における言葉使いが確かに「卑俗」で幼稚であること(大杉氏)について、当時のキリシタン文学における言文一致運動との関連で解説がなされた(武村氏)。言文一致的な口語文体の出現は春などの知識人にとって脅威であっただろうという見解(武村

氏) に対し、翻ってそうした新たな言語様態こそが脱文脈化のツールとして大きな力を持ちうるという指摘があった(井頭氏)。また、そもそも春と干の議論には西洋思想の翻訳という別局面での脱文脈化が内在していたのではないかという指摘があり(大杉氏)、キリシタン文学における翻訳の問題は総じて面白いヒントになりうるとの応答があり(武村氏)、脱文脈化における言語の使い方や翻訳の意義が確認された。